

【研究ノート】

「質的測定シート」を活用した教員研修ワークショップの試行的実践

京都大学 服部 憲 児

はじめに

本稿は、2つの科研費助成研究（課題番号 15K13179 および 18K02304）¹⁾の一環として開発を進めてきた「質的測定シート」（以下、測定シート）を活用した教員研修について、その効果と課題、可能性について考察を行うものである。

上記の2つの科研費助成研究は、いずれも数値で把握しにくい教育の成果を測定する方法を開発することを目標として掲げている。今日、学校・教育関係者に対しては社会・産業界などから厳しい目が向けられており、学校評価や説明責任、成果の「見える化」に対する要望が高まっている。しかしながら教育には、子どもたちの行動面や意識面、生活面など数値で表しにくい部分が多く、また様々な取組が相互に影響し合ったりしており、特定の施策の効果の把握が極めて困難である。その一方で、現場関係者は経験的にそれらの効果を実感していることも事実である。そこで、教育に特有の数字で表しにくい部分、複雑に絡み合っている相互の活動を、現場の感覚や実践知・経験知に立脚しながら、成果を質的に測定する手法を開発する必要があると考える。

このような問題意識のもと、平成 27 (2015) 年度から小中学校ならびに教育委員会の協力を得て、学校現場での聞き取り調査を中心に教育の成果を質的に測定する方法の開発を試み、その一部として測定シートを作成した。その過程において、3年間にわたり協力いただいた学校・教員に対して、成果の何らかのフィードバックないしは還元を行う必要を認識するに至った。そこで、研究データの取得と教員の振り返りに資することを目的として、「教育成果の質的測定にかかるワークショップ」（以下、ワークショップ）を企画し、2小学校・7名の教員の協力を得て、試行的にこれを実施した。

本稿は、かくして実施したワークショップに使用した各種資料（ワークショップ時に教員が記入した各種シートなど）および当日の言動などをもとに、その成果と課題を明らかにすることを目的とする。これは、教育成果の質的測定に関する今後の研究の基礎的作業として位置づけられるものである。

1. 測定シートの開発とワークショップの企画意図

本ワークショップで用いた測定シートは、文末資料として掲載している。そこでは各項目について教員に 10 段階で評価して数値で記入してもらう形式になっている。この点については、数値に表しにくい部分の切り捨てを理由に量的測定万能主義を批判する上記立場と矛盾するとの指摘が大いに予想されるので、開発の経緯を含めて説明をしておきたい。本シートは、上記科研費助成研究（課題番号 15K13179）において開発を目指したものであり、当初は各項目について教員に記述していただく形式を目指していた²⁾。しかしながら、実際に記述型のフォーマットで記入を依頼したところ、多忙や項目に対する言語化の難しさから、多くの教員にとって負担であることが明らかになった。そのため、協力教員の記入の

負担も考慮し、便宜的に数値で表してもらい形式に変更した。その結果、記入に要する時間が大幅に削減され、回答しやすいとの評価を得た³⁾。

測定シートの作成にあたっては、その前段階における聞き取り調査も含めて、研究協力校の教員には多大な時間をさいていただくことになった。そのため、研究成果を研究ベースでフィードバックするだけでなく、実践ベースでも現場に還元する必要があるのではないかと考えるに至った。そこで、研究用に収集したデータを、教員の実践の振り返りに活かすようなワークショップの実施を企画した。

2. ワークショップの実施概要

上記のような経緯によりワークショップを試験的に実施することを研究協力校の校長に打診し、いずれも快諾を得た。ワークショップの時間は、教員の負担を最小限に抑えるため、1時間を上限とした。対象となる教員は、平成30(2018)年度に調査対象であった学年のクラス担任で協力いただける教員としたが、試験的实施であったため参加は任意とした⁴⁾。その結果、A小学校は4名、B小学校は3名の教員の参加を得た。それぞれの小学校を会場とし、筆者がリードし、研究分担者・研究補助者が適宜サポートする形でワークショップを進行した⁵⁾。

今回のワークショップの流れは以下の通りである。

- ①作業等の説明
- ②年度当初の児童の様子等を測定シートに記入
- ③学年末の児童の様子等を測定シートに記入
- ④一年間の取組（個人レベル・学年レベル・学校レベル）の振り返り
- ⑤特徴的な項目についての検討：何が効果的であったか等
※個人作業の後にグループでの話し合い。
- ⑥各自の教育活動についての総括（省察／まとめ）
- ⑦ワークショップについての感想記入

本来であれば、②については1学期中に記載しておいてもらうべきものである。しかしながら、測定シートの修正作業が遅れたため、年度当初を思い出して記入する形とした⁶⁾。また、④以下の作業に時間を割くためには、③も事前に記入してもらうことが望ましかったが、協力者の負担を少しでも軽減するために、ワークショップの時間内に記入することとした。

過去3年間において教員にインタビュー調査を実施した経験から、教員は、単に教育成果の要因を尋ねると個人の取り組みとの関係で語る傾向が強いが、学校や学年の取り組みとの関係について尋ねると、それら取り組みと教育成果との関連性についても説明ができる。つまり、学校や学年の取り組みと教育成果の関係を認識はしているが、ともすれば忘れがちである。そのため、④において、1年間の個人の取り組み、学年全体での取り組み、学校全体での取り組みについて記入してもらった。学年・学校レベルの取り組みに関しては、当日の作業において他の教員からの指摘で気づく教員もいた。

次の⑤の段階では2つの測定シートを見比べてもらい、特徴的な項目（大きく変化している項目）を中心に、何が効果的であったか等について個人での振り返りをしてもらった。この作業がある程度進ん

だところで、グループでの話し合いをしてもらった。その後、それぞれ1年間の教育活動の省察・まとめをもらい(⑥)、ワークショップ自体についての感想を記入してもらった(⑦)。

3. ワークショップの分析 ― その成果と課題 ―

次に、ワークショップの際に教員が記入した各シートについて、分析していく。

(1) 「質的測定シート」の分析

まず、全体平均を見ると、4つの区分(学習指導、生活指導、教員、地域・家庭)とも年度当初よりも年度末の方が高くなっている。区分により0.5~1.4ポイント、全体では1.1ポイント上昇している。

各項目の点数記入については、教員の見方・思考を尊重することとし、回答の目安として「10の状態」を示すにとどめ、細かい基準は設けなかった。そのため各教員の中では評価の基準・観点は一貫していると思われるが、教員間にはばらつきがあって当然ということになる。実際に、ワークショップ当日においては、各教員が独自の基準・観点で点数を記入していた。それでも、年度当初と年度末について記入された数値を比べると、多くの教員・多くの項目で右肩上がりとなっている。つまり、教員は児童の向上を実感している⁷⁾。学校別では、全体的にA校の方が初期値が低く、伸び幅が大きくなっている。ただし、これが学校間の特徴の差なのか、参加した教員の特性によるものなのかは、別途検討が必要である。

(2) 要因記入シートの分析

現場の教員は、上述の通り、特に何も条件を付けなければ児童の変化の要因として個人の取り組みを挙げる傾向にあること、学校全体や学年の取り組みなどの影響を尋ねればその効果について答えることが、聞き取り調査を行ってきた経験上分かっていたので、「1年間の取り組み記入シート」に記入してもらう作業を入れ、学校全体、学年(群)全体を含む取り組みの振り返りの作業を取り入れた。しかし、それでも「成果とその要因に関する記入シート」に書かれた内容は、記述は個人の取り組みに限定されていた。言い換えると、学校全体の取り組みや学年(群)の取り組みは、児童への変化の要因としては認識されていなかった。このことの解釈は非常に難しい。教員が全体の取り組みや学年(群)の取り組みを意識していないのであれば何らかの対策が必要となろう。しかし、それらが身体化されている可能性も考えられる。すなわち、意識しなくても各教員の取り組みや行動に反映されているのであれば、むしろ評価すべきことである。この点については今回のワークショップの範囲内では分からないので、詳細な分析が必要となる。

効果があったと思う要因として教員が挙げたものの多くは、当然ながら児童への働きかけ、意図的な取り組みである。最も多かったのは、継続的に繰り返し行ったものである。例えば、「当たり前のことを当たり前にしよといいい続け、責任について話を繰り返し行ったこと」、「小グループの活動を何度も取り入れたり、話さなければいけない場の設定を作り、慣れてきた」などである。また、「子供のかかり活動による意識づけ、学級代表の責任感」、「社会の授業で、例を挙げて説明したりすることで興味が持てた」、「理科の単元ごとのまとめをさせて、点数をつけることで、きれいにまとめられるようになった」のように、自律を促す取り組み、きめ細かい指導や工夫も記入されていた。ここから、教員は児童生徒に粘

り強く働きかけていること、その苦勞が成果として現れていると認識していることが分かる⁸⁾。

(3)感想の分析

「感想記入シート」には「先生の教育活動について」と「本ワークショップについて」の2つの欄を設けて感想を記入してもらった。以下、それぞれについて検討するが、想定していたものと反対の欄に記載している例も散見されたので、ここでの分析においては両者の区分は内容で判断した。

まず教育活動については、教員間の相互理解や他者の取り組みの参照という点で有効とする意見が多かった。例えば、お互いの「評価規準の違いが分かりました。普段からこのような話をしておけば、クラス間、学年間の意識が統一されていいと思います」、「他学年の先生とも話し合っ、いろんな意見が聞けてよかった」、「他学年の取り組みや気を付けていること等、普段はわからないことも多く、今後の参考になった」などである。また、「自分の振り返りができた。自分のいいところが見えた。まだまだ学習していかないといけないと思った」、「自分を振り返る機会は大事だと思うので、よかったと思う」のように、自己の取り組みの反省、確認、振り返りの機会になったとする記述も比較的多く見られた。

以上のことからすると、実は教員は相互の教育活動等についてあまり知らないということが分かる。実際に、教員の記述の中には、このことが学年間、クラス間の統一性不足の一因とする指摘も見られた。これからの教育課題は組織的取り組みが必要なものが増えると予想され⁹⁾、国レベルでは「チームとしての学校」政策が推進される中、学校経営における重要課題として位置づけられよう。

次にワークショップ自体については、概ね肯定的な評価であったが、いくつかの課題も指摘された。1つはワークショップの時間が短すぎるというものであった。教員の多忙化に配慮し、ワークショップは1時間以内とすることにし、その通りに実行した。しかしながら、指摘された通り、深く掘り下げて議論をするには短すぎることは間違いない。もちろん、多忙化に配慮しなければ、長時間にわたるワークショップを組むこともできる。多忙化への配慮とのジレンマである。

もう1つは、グループワークの善し悪しである。教員同士で話し合いながら振り返りをしてもらったのは、互いの取り組みを知る、互いの良いところを指摘しあう、他者の取り組みからヒントを得る、気づいていないことを相互に補い合うといった効果を期待したからである。このことについては、上に例示した記述にあるように、少なくとも一定の効果はあったと捉えられる。しかし、一方では、関係する先生（例えば、現クラスの児童を過去に担任したことがある先生）が同席していることで、内容によっては話にくいこともあったようである。この点に関しては、事前に予想することができなかった。大きな反省材料の1つであり、グループワーク形式で行うメリットである相互理解の促進とのジレンマを解決する方途を考える必要がある。

まとめにかえて

以上、独自に開発を行ってきた「質的測定シート」とそれを活用したワークショップ型研修の分析を行ってきた。そこで確認されたのは、教員は個人の取り組み中心で教育や児童を見ているということである。これはある意味当たり前のことで、これ自体は決して否定的に捉えられるべきことではない。しかし、言い方を変えれば、組織的な取り組み（学校・学年全体の取り組み）については、日常的な教育活動の中で十分に意識されていない可能性があることにもなる。もちろん、このことは教員が組織的な

取り組みに反する行動を取っていることを意味するものではない——意識しなくても取り組まれている可能性もある。

しかしながら、ワークショップで組織的な取り組みを想起させるプロセスを踏んでも、それらを成果と結びつけては認識していなかったことをどのように解釈すれば良いのであろうか。組織的取り組みは個人個人の取り組みよりも効果が薄いのか。教員の日常的活動の中でそれが意識されにくいために、効果が発揮されにくいのか。あるいは、効果はあるがそれとの関係で認識されにくいのか。さらに検討する必要はあるが、組織的取り組みに全く効果がないとは考えにくい。効果があるとすれば、とりわけ意識すればより効果が上がるとするならば、教員が恒常的に全体的なことを意識するような方法を考える必要がある。あるいは、教員の多くは個人の取り組みの範囲で成果や児童たちや見ていることを前提とした学校経営、つまりそのような性質を活かした学校経営の方法を追究していく必要がある。これらの可能性については、今後の研究課題としたい。

最後に今後の展望を示して本稿を終えたい。今回分析したワークショップ型研修の試行を踏まえて、本実施を予定している。さらに、各学校で自立的に実施できるように、ウェブを活用した実施の可能性について検討していきたい。

註

- 1) 日本学術振興会科学研究費助成事業・学術研究助成基金助成金交付研究「学校改善に向けた『往還型』質的測定手法の開発的研究」(研究代表者:服部憲児、課題番号 15K13179)(挑戦的萌芽研究 2015~2017 年度)および「教育成果の質的測定を活用した教員・学校・教委連携型教育改善システムの開発的研究」(研究代表者:服部憲児、課題番号 18K02304)(基盤研究(C) 2018~2020 年度)。
- 2) 各項目の設定された詳細については、服部憲児研究代表『学校改善に向けた「往還型」質的測定手法の開発的研究』(平成 30 年) 参照。
- 3) 測定シートを選択式にする際に、当初は A~D の 4 段階での回答を検討していたが、作成の過程で選択肢の中間を選ぶケースも十分に想定されたため、それぞれの中間と「A 以上」「D 以下」の選択肢を加えた測定シートを作成した。この書式で記入を依頼したところ、「A」「A と B の中間」に回答が集中するとともに、回答ミスが多かった。そのため、サンプルに 10 段階で評価してもらい、6~9 あたりで差が付くことを期待して現行の書式となった。
- 4) ただし、校長からの推奨はあったと推察している。
- 5) 実施日時の詳細は以下の通りである。
A 小学校:平成 31(2019)年 2 月 27 日 14:30-15:30 B 小学校:平成 31(2019)年 2 月 22 日 16:00-17:00
- 6) 今年度(令和元年度)については、質的測定シートを定点ごと(年度初め、年度途中(2 学期)、年度末)に記入できるようなスケジュールで実施している。
- 7) ただし、同時期に記入してもらったことによる影響は排除できないので、次年度以降の実施・分析結果と合わせてさらに検討する必要がある。
- 8) この他に、前年度の担任からの積み上げについての指摘もあった。これは我々研究グループ内で十分に考慮されていなかったもので、今後の参考としたい。
- 9) 服部憲児「教育行政の基本原則」高見茂・服部憲児編著『教育行政提要(平成版)』(協同出版、平成 28 年) 81-82 頁。

【付記】本研究は科研費の交付を受けて実施している(課題番号 18K02304)。

【謝辞】I would like to thank Editage (www.editage.com) for English language editing.

[研究ノート] 質的測定シートを活用した教員研修ワークショップの試行的実践

氏名		現在の 役職	担任	年 組	教員歴	校目	年目
			専科			(現在の勤務校では 年目)	

- * 各項目について、「10の状態」と比べた場合の現時点での状態を10段階（1～10）で評価し、右側の「評価」欄に数字を記入してください。
- * 「10の状態」は評価の基準となる究極の状態を示しています。現実的には難しい状態であることはご了承ください。
- * 「10の状態」以外（1～9の状態）の基準は評価者の主観で構いません。

A 学習指導に関すること

項目	10の状態	評価
① 挙手や発言の人数・頻度	定まった答えがない問いかけに対しても全ての児童が積極的に挙手を行う	
② 班活動・話し合いへの主体的な参加	全ての児童が班活動・話し合いに積極的に参加し、意見を主張できている	
③ 授業内容への興味関心・好奇心	極めて高く、全ての児童が教員の話に聞き入ったり、教材への関心を示したりする	
④ 他の子どもの意見を尊重する力	全ての児童が、他の児童の発言・意見を否定したり無視したりせず、尊重した上で発言ができる	
⑤ 授業中の落ち着き・集中力	全ての児童が授業に集中して参加しており、注意散漫な様子（私語、立ち歩き、よそ見、上の空など）は全くない	
⑥ 子ども同士の教え合い、声かけ	学習が進んでいる子が遅れている子に対して自発的かつ優しく教えることができる	
⑦ ノートやプリントの書き取りと整理	全ての児童が極めて丁寧に字を書き、ノートやプリントの記述がきれいにまとめられている	
⑧ 宿題・提出物の提出状況	宿題・提出物の提出率は100%で、期限にも遅れない	

B 生活指導に関すること

項目	10の状態	評価
① 学校および学級のルールを守る	学校および学級で定められたルールは完璧に守られている	
② 時間を守る	全ての児童が休み時間・授業時間の切り替えを素早く行える	
③ 集団行動・整列など	教師の指示が無くても、全ての局面で、自発的に整列したり集団行動したりできている	
④ 係活動や掃除などでの責任や役割遂行	全ての児童が学級活動における役割を引き受け、自分の責任を果たそうとする	
⑤ 学校行事への主体的な参加	全ての学校行事に対してクラス全員が主体的に参加している	
⑥ クラス内の人間関係・仲の良さ	男女問わずクラス全体の仲が非常に良く、全員が学校生活を楽しめている	
⑦ 挨拶・言葉遣い	全ての児童が教員や地域の人に対して自発的かつ元気に挨拶をすることができ、場面に応じて適切な言葉遣いができる	
⑧ 児童間のトラブル（喧嘩・いじめなど）	児童間のトラブルは全くない、あるいはあったとしても自分たちで解決できる	

(裏面へ続く)

B 生活指導に関すること (続き)

⑨ 特に課題のある児童への対応はどうしていますか？	(自由記述)
---------------------------	--------

C 教員に関すること

項目	10の状態	評価
① 日頃の授業準備・教材研究	勤務時間を大幅に超過することなく、授業準備・教材研究に十分な時間が取れている	
② 同学年の教員との関係	同学年の全てと教員と、日頃から業務に関する話題やその他の話題を問わず、何でも気兼ねなく話し合えて情報を共有できる	
③ 他学年の教員との関係	他学年の教員とも、必要に応じて業務に関する話題やその他の話題を問わず、何でも気兼ねなく話し合えて情報を共有できる	
④ 子どもとの関係	児童との関係は極めて良好であり、子どもの性格や家庭状況をしっかり把握できている	
⑤ 学級事務（提出物のチェック、採点など）の負担感	学級事務を処理する上での負担感は全く感じない	
⑥ 校務分掌等の負担感	校務分掌での負担感は全く感じない	
⑦ 研究授業や校内研修	研究授業や校内研修の質・量は適切で、実際に役立っていると感じる	

D 地域・家庭に関すること

項目	10の状態	評価
① 保護者対応	全ての保護者と極めて良好な関係が築けており、自らの学級経営・指導に対して強い信頼を感じる	
② 保護者や地域住民同士の関係	保護者や地域住民同士の関係は極めて良好であり、トラブルなどは全くない	
③ 保護者や地域住民の子どもや学校への期待	保護者や地域住民の学校への期待は極めて高く、学校の活動に積極的に支援・協力してくれている	

この他に、特筆すべき点や感想、評価に関する補足説明等がございましたら自由にご記入ください。

Analysis of a Teacher Training Program Using “Qualitative Measurement Sheets”

Kenji HATTORI

The purpose of this study was to analyze the findings of a teacher training program using Qualitative Measurement Sheets (QMS), which were developed with the assistance of elementary school teachers, and to identify the limitations of this training program. The reason for conducting this teachers' training was to provide feedback based on the research findings to schools and teachers who cooperated in the QMS development.

The training was conducted by the author and consisted of the following three sections: reflection on each teacher's educational activities using QMS in one year; group discussions on changes observed in students and the reason for these changes; and evaluation of the teacher training program.

The analysis of the worksheets used in this training led to the following three findings:

1. Teachers look at educational activities and students in relation to their individual efforts and are not conscious of school-wide or grade-wide efforts.
2. However, this outlook of the teachers should not be taken negatively.
3. The school management should take steps to improve the teachers' outlook or the management of the school that is based on such an outlook.

With regard to the evaluation of the training program, while it was a good opportunity for reflecting on the teachers' educational activities and inculcating mutual understanding among them, the lack of time and the merits and demerits of group discussion were some of the issues that were pointed out.